

日本人が海外へ個人旅行することもさして珍しいことではなく、筆者も海外(アジア・南米)でバックパック旅行を体験した。そこには、自由な旅をするバックパッカーと、彼らを顧客とする安宿が存在し、周辺の産業もそれに対応していることが多い。つまりバックパッカーをあてこんだ商業空間が出来ている。

物価の高い日本ではこのようなバックパッカーを受け入れる空間は成立するのだろうか。また、よその排除意識が強いといわれる日本社会で、果たして外国人であるバックパッカーたちは快適に過ごせるのだろうか。

そこで、本論文では日本における外国人観光、中でも個人旅行(FIT: foreign independent tour)の実態を検証した。研究方法は、文献研究のほか、外国人向けのガイドブック、インターネットのホームページなどのテキスト分析と、東京都の観光振興課・宿泊施設を利用する外国人宿泊客・宿泊施設の経営者に対する聞き取り調査である。

個人旅行者が多様化する一方で、その受け皿である宿泊施設は、異文化の直接接点の最前線にある。本論文では、より多くの旅行者が5000円以下の低廉な価格で利用できる宿泊施設の形成過程の実態とそこでの文化接点の考察した。考察からいえることはグローバル化に対応して日本も変わりつつあるということである。人の移動の一つで

ある旅行において、FITの側は日本イメージの変化として、宿泊施設の側は異文化に対して寛容になるという形で異文化の相互作用は直接接点の場で見られた。

このような異文化の直接接点の場は、単に世界がグローバル化した結果できたわけではない。今や外国人旅行者受け入れのパイオニアとなった澤の屋旅館は、20年前経営的な背景からやむなく外国人旅行者を受け入れだした。一方でここ5年以内の間に受け入れを始めた宿泊施設は、経営者自身が旅が好きで、気軽に外国人を受け入れる場を作りたいという意思により外国人の受け入れを始めている。つまり、グローバル化と受け入れる側の理由がつながることによって、現在の異文化接点の場が生まれたのである。

近年、東京都や国をはじめとして行政の側も訪日観光に対して積極的になりつつある。訪日観光客を増やすことは産業を活性化する効果があり、旅行形態が多様化する中で低廉かつ特色を持った宿泊施設は、旅行者が日本を知る上でも手助けとなっている。しかしその一方で外国人旅行者を受け入れることに戸惑いがあるのも事実である。本調査を通して浮き彫りになったことは受け入れの根本にある日本人の排他性である。外国人の受け入れは多くの日本人にとってまだまだ特別な行為なのである。

暖簾の向こう——質屋の実態調査——

牛田 典子

1953年には全国に約2万軒以上あった質屋は、2002年現在、約4千軒にまで減り、東京都内でも約1500軒から約700軒に減った。衰退の原因は、①イメージの悪さ、②認知度の低さ、③新規参入がない、④国民の所得向上、⑤クレジットカードの普及、⑥リサイクルショップの台頭、⑦消費者金融の台頭などが挙げられる。しかし近年は、一部の質屋が生き残りをかけて、時代に合わせた店づくりを始めたため、質屋の二極化がみられるようになった。伝統に固執し、なかばやる気を失いかけている地味な質屋と、きらびやかなブランドショップを併設したり、積極的に質流れ品バーゲンに出店したりしてい

る華やかな質屋とに分岐したのである。

筆者は、台東区の質屋を取り上げ、タウンページ(2001年3月～2002年2月)に掲載されていた質屋28軒をまわって聞き取り調査を行ったが、営業中だったのは21軒であった。1年程の短期間で7軒も廃業していたのである。台東区の質屋は高齢者が経営していることが多く、後継者不足は深刻である。営業中の21軒においても、自分の代で店を閉じることになるという質屋がほとんどである。そして、そのことがより一層やる気を失わせている。台東区の質屋は、若年層の客が少なく、細々と経営している質屋ばかりであり、淘汰されてしまうのだろう。

さらに、質屋には多くの問題がある。①防犯対策、②偽造品の増加、③立地の悪さ、④イメージの悪さ・認知度の低さ、⑤高齢化などである。生き残るためにはどうしたらよいのだろうか。例えば、各質屋が専門分野を持ち、特色をアピールし

たり、イメージをよくするためにブランドショップを併設したり、ホームページでネットオークションをしたり、と時代に合わせた質屋づくりが必要である。このとき、東京質屋協同組合青年部の役割は大きい。

日田の霧について

大塚 愛子

日田市は大分県西部に位置し、周囲を山に囲まれた盆地で昔から霧の多いところとして知られている。朝日新聞（2002.5.18）の記事によると、東京では最近2年近く霧が観測されていないということである。東京の場合は都市化の影響が考えられるので、その効果が少ないと判断される日田において、霧の発生に近年どのような傾向がみられるのかを調査した。

調査は、日田特別地域気象観測所の地上観測日原簿、地上観測月原簿に基き行った。調査対象期間は1978年から2001年までの24年間である。この期間は1978年から霧の観測に用いられる測器として視程計が新しく導入されたことにより決定した。ただし、2001年は視程計の機種変更等がなされ観測方法が従来と異なるため考察には加えなかった。

霧発生日数の経年変化をみると対象期間当初の年間70～80日から近年の30日以下に、明らかに減少している。月別に検討した結果、霧発生日数は秋季・冬季（9月から2月）に多いが、霧日数の減少は10月11月に大きいことがわかった。

次に、日田で発生する霧は放射霧が多いために、夜間放射冷却を生じさせやすい気圧配置である移動性高気圧型との関係を確認した。その結果移動性高気圧型気圧配置出現数は減少していないことから、日田の場合、霧日数の減少は移動性高気圧減少の結果ではないことが確認された。

霧日数減少と気温との関係を調べるために、10月と11月の霧発生日について日最低気温の変化を調べたところ、弱い上昇傾向が認められたが、気温との関係についてはさらに調査が必要である。

下北沢のまちと劇場

大村 由紀子

『芸能白書2001』によれば、国民の演劇鑑賞率は約10%で映画の3分の1である。日本は数の上では劇場先進国だが、それが都市や地域の活性化と結びついていないようにみえる。本論文では、都市から孤立しない劇場の在り方、まちにおける劇場の存在意義をさぐるために、9つの劇場があり「演劇の街」と呼ばれる下北沢を対象に調査を行った。

その結果、下北沢の劇場はその「界限」とうまく共存していることがわかった。それらは雑居ビルの中に他の店舗と混じってさりげなく存在している。また、演劇鑑賞後に訪れる飲み屋や飲食店、あるいは服飾雑貨店などが駅周辺の盛り場に多く存在し、劇場と客を共有している。

さらに下北沢独特の文化を象徴するものとして、劇場が果たしている役割も大きいと言える。劇場と盛り場、都市文化の相互依存関係が成立しているところが、下北沢が「演劇の街」と呼ばれる所以である。

しかし一方で、ふつうの地元住民が演劇・劇場に対して全く無関心である事実も明かになった。駅前の盛り場は外からやって来る若者を対象につくられてきたために、その周囲にある地元住民の生活空間との間に深い溝をもっていたのである。

劇場の存在意義は、劇場をつつみこむまち全体を視点におき、そのまちに合った劇場をつくり、共に都市文化を育てていくことにあるので